

魚玄機の詩と道教

——唐代の閨秀詩人の愛と悟りの間——

人文社会科学部（アジア研究）

砂 山 稔

序 言

魚玄機と薛濤は唐代の閨秀詩人の双璧であるが、森鷗外の同名の小説により、日本では魚玄機の方が良くその名を知られている。

唐詩の世界は、男性中心の世界であり、女性の感情が詩われる場合も、男性詩人の心を介在して抒べられるのを常とした。その中において、魚玄機の男性を思う愛の詩は、女性の肉声をそのまま伝えるものとして、一際、光彩を放っている。

ところで、この魚玄機は十六歳の時より、唐代に盛えた道教の「清虚」（欲望を去った清らかな心境）に憧れたと伝えられ、また、後年、女道士となっているのであるが、一面、その詩に「多情は是れ足愁（言い尽せない程の憂愁）」と語る如く、恋愛感情の呪縛から脱していないのである。

小論は、この魚玄機の詩に見える恋愛感情の呪縛と道教的な悟りとの葛藤の考察を通じて、魚玄機の実像の解明を目指すものである。

第一章 魚玄機と森鷗外

森鷗外の歴史小説『魚玄機』は、大正四年（1915）七月七日に脱稿、同月の中央公論に発表され、歴史小説『寒山拾得』もまた、同じ大正四年の十二月七日に脱稿、翌五年（1916）一月の新小説に掲載された。

この二つの歴史小説¹⁾は、第一として、物語の展開する場所と時代を中国の唐代に求めている点、第二として、詩人に関わっている点、第三として、宗教に関わっている点に共通性が見られる。

しかし、一方で、この二つの歴史小説は著しく対照的である。まず、時代設定で言えば、『魚玄機』では、唐王朝の衰微して行く晩唐の会昌から咸通年間（841-874）がそれに充てられ、他方、『寒山拾得』では、唐王朝の興起して行く初唐の貞観年間（627-649）がそれに充られている。また、人について言えば、魚玄機は美貌の女流詩人であるのに対して、寒山は超俗の隠逸詩人であり、更に宗教に関して言えば、『魚玄機』では道教的な世界が描かれているのに対して、『寒山拾得』では仏教的世界が描かれているからである。

両者の対蹠的な有様を具体的に確認する為に、まず、『魚玄機』の冒頭部分を掲げ、次に、『寒山拾得』の結末部分を取り挙げよう。

最初に、魚玄機と道教について紹介する『魚玄機』の冒頭部分を引用する²⁾。

魚玄機が人を殺して獄に下った。風説はたちまち長安人士の間に流伝せられて、一人として事の意表にいでたのに驚かぬものはなかった。

唐の代には道教が盛んであった。それは道士らが王室の李姓であるのを奇貨として、老子を先祖だと言いなし、老君に仕うることを宗廟に仕うるがごとくならしめたためである。天宝以来西の京の長安には太清宮があり、東の京の洛陽には、太微宮があった。そのほか都会ごとに紫極宮があって、どこでも日を定めておごそかな祭りが行なわれるのであった。長安には太清宮の下に幾多の楼観がある。道教に観があるのは、仏教に寺があるのと同じ事で、寺には僧侶がおり、観には道士がおる。その観の一つを咸宜観といって女道士魚玄機はそこに住んでいたのである。

玄機は久しく美人をもって聞こえていた。趙瘦と言わむよりは、むしろ楊肥と言うべき女である。それが女道士になっているから、脂粉の顔色をけがすをきらっていたかというのと、そうではない。平生粧よそおいを凝らし容かたちを冶かざっていたのである。獄に下った時は懿宗の咸通九年で、玄機はあたかも二十六歳になっていた。

玄機が長安人士の間に知られていたのは、ひとり美人として知られていたのみではない。この女は詩をよくした。(中略) そういう美しい女詩人が人を殺して獄に下ったのだから、当時世間の視聽を聳動したのも無理はない。

少しく長文の引用となったが、魚玄機の人となり、道教についての要領の良い紹介であるので、冒頭部分の大半を掲げた。鷗外が道教についてやや詳細な説明をしているのは、中国民族(漢民族)固有の民族宗教である道教が、仏教と違って、日本人には馴染の薄いものであることを配慮した為であろう。猶、補足すれば、太清宮などの「宮」は大規模な道観を言うのである。一方、女詩人魚玄機の容貌については、詩の師匠温岐(温庭筠)との最初の出会いの折の十五歳の魚玄機について、鷗外は「温の目に映じた玄機はまさに開かむとする牡丹の花のような少女である。」と形容している。

さて、次に『寒山拾得』の結末部分の文殊と普賢にも譬えられる悟道の僧、寒山と拾得の様子を描写しているところを引用しよう。

「はなはだむさくるしい所で」と言いつつ、道翹は閭(閭丘胤)を厨の中に連れ込んだ。ここは湯げがいっぱいにこもっていて、にわかにはいって見ると、しかと物を見定めることもできぬくらいである。その灰色の中に大きい竈が三つあって、どれにも残った薪がまっ赤に燃えている。しばらく立ち止まって見ているうちに、石の壁に沿うて造り付けて

ある草の上でおおぜいの僧が飯や菜や汁を鍋釜から移しているのが見えて来た。

この時道翹が奥のほうへ向いて、「おい、拾得」と呼びかけた。

閻がその視線をたどって、入り口からいちばん遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧のうずくまって火に当たっているのが見えた。

一人は髪の二三寸伸びた頭をむき出して、足には草履をはいている。今一人は木の皮で編んだ帽をかぶって、足には木履をはいている。どちらもやせて身すぼらしい小男で、豊干のような大男ではない。

道翹が呼びかけた時、頭をむき出したほうは振り向いてにやりと笑ったが、返事はしなかった。これが拾得だと見える。帽をかぶったほうは身動きもしない。これが寒山なのであろう。

閻はこう見当をつけて二人のそばへ進み寄った。そして袖をかき合わせてうやうやしく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閻丘胤と申すものでございます。」と名のった。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合わせて腹の底からこみ上げて来るような笑い声を出したかと思うと、いっしょに立ち上がって、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が「豊干がしゃべったな」と言ったのが聞こえた。

驚いてあとを見送っている閻が周囲には、飯や菜や汁を盛っていた僧らが、ぞろぞろと来てたかった。道翹はまっ青な顔をして立ちすくんでいた。

ところで、長谷川泉氏は『寒山拾得』の作品構造に重きを置きつつ、「『寒山拾得』は、題名こそ求道の隠士寒山と拾得のことになっているが、主として描かれているのは俗吏閻丘胤の心理や態度である。寒山と拾得とは、終末において現われるに過ぎない。しかも、鷗外の執筆の興味の焦点は、寒山と拾得の悟道の極致を描くことにあるのではなく、寒山と拾得の前に展開される滑稽な戯画中の人物となる閻丘胤にそそがれているのである。」と述べて居られる³⁾が、やや文字面に拘泥された見解としか思われぬ。むしろ、田口正直氏が「この作の主題は、閻丘胤と寒山・拾得の何れにあるとも言い難く、強いて言えば、閻丘胤によって示される『盲目の尊敬』を、寒山拾得と一緒に作者が笑っているとでも言うほか仕方がないように思えるのである。換言すれば、『盲目の尊敬』者に対する批判と同時に、寒山・拾得の高い境地に思いを寄せる作者の気持が描かれていると思うのである。そして、この作の主人公は誰かと言えば、それは閻丘胤ではなくて、やはり寒山・拾得であると考えるのである。」と語って居られる⁴⁾方が作品の本質に接近していると認められるのである。否、むしろ、『寒山拾得』は、専ら、否定的媒介たる俗吏閻丘胤を描くことによって、とりもなおさず、その対極にある隠士寒山拾得の悟道の境地を表現しようとしたものではなかったか。これに対して、『魚玄機』の方は、既に斎藤茂吉氏によって纏められているように、「唐の代の長安の一倡家に、魚玄機という一

少女がいた。武宗の会昌三年生まれで、玄機はその容美麗かたちであったのみならず、詩作を好み温飛脚を師とした。咸通元年玄機が十八歳の時、李億という者の妾となったが、まもなくそれをやめて、咸宜観に入り女道士となった。観内に道家の修行をしているうち、約一年を経た懿宗の咸通二年の春、忽然悟入して玄機ははじめて真に女子となった。ついで陳某という青年と相知り、相親しむこと七年、咸通九年の陽春三月、嫉妬のために緑翹という婢を殺し、立秋のころ法によって斬に処せられた。時に玄機は二十六歳であった。⁹⁾」と全篇、魚玄機についてひたすら語って間断がない。そして、ここに「道家の修行をしているうちに」「悟入」したというのは女性としての肉体の目覚めをいうのであって、精神的な悟道ではない。『魚玄機』の中で「温はこの（魚玄機の……筆者補足）詩を受けて読むごとに、語中に閨人の柔情がようやく多く、道家の逸思がほとんどないのを見て、いぶかしげに首を傾けた。」と語られている如く、魚玄機は肉体より発する柔情に呪縛されているかに描かれているのである。つまり、『魚玄機』は、ひたすら魚玄機を描くことによって、魚玄機の迷妄の世界を浮き彫りにし、一方、『寒山拾得』は、もっぱら寒山・拾得を描かないことによって、寒山・拾得の悟道の境地を言外に現出させたのであると言えよう。

既に引用した『魚玄機』の冒頭部分と『寒山拾得』の結末部分から暗示されるように、『魚玄機』の世界は、脂粉の芳香の漂う極彩色の蒔絵のような有情の世界であり、他方、『寒山拾得』の世界は、俗塵の臭気を超越した無彩色の水墨画のような無情＝非人情の世界であり、そこには、東洋思想の範疇における有と無の対照があるのである。

有と無の対照、……それは、『魚玄機』と『寒山拾得』における詩の取り扱いにも顕著に見られる。周知のように、魚玄機には、『唐女郎魚玄機詩』に載せられる約五十首の詩が存し、これに対して、寒山には、『寒山子詩集』に約三百首が載せられており、古くは、寒山、拾得と今一人の僧、豊干の詩を並べ収録した『三隠詩』が存した。鷗外が寒山の詩を熟知していた事は、その『寒山拾得縁起』の中で、寒山の詩について子供に訊ねられた鷗外が「私は取りあえずこんな事を言った。床の間に先ころ掛けてあった絵をおぼえているだろう。唐子のような人が二人で笑っていた。あれが寒山と拾得とをかいたものである。寒山詩はその寒山の作った詩なのだ。詩はなかなかむずかしいと言った。」と述べている点からして、言う迄もないことであるが明白である。ところが、鷗外は、『寒山拾得』の中で、拾得・豊干の詩は勿論、悟道の境地を歌う作品を含む三百余首を数える寒山の詩を一首も引用していないのである。これは、『魚玄機』の中で、六首の詩を引用して、彼女の折に触れての心情を描写しようとしているのと、やはり対蹠的である。例えば、鷗外が、魚玄機が詩の師匠温庭筠との初対面の折、魚玄機が「江辺柳」の詩題を課されて詠んだと設定した詩は次のようなものである。

賦得江辺柳　江辺の柳を賦し得たり

翠色連荒岸	翠色	荒岸に連なり
烟姿入遠楼	烟姿	遠楼に入る
影鋪秋水面	影は鋪く	秋水の面
花落釣人頭	花は落つ	釣人の頭
根老蔵魚窟	根老いて	魚窟を蔵し
枝低繫客舟	枝低れて	客舟を繫ぐ
蕭蕭風雨夜	蕭蕭たり	風雨の夜
驚夢復添愁	夢を驚かして	また愁を添う

この詩については、清の黄周星は『唐詩快』の中で、首聯について、「『翠色』の兩句は、情景俱に絶まれり」といい、明の鍾惺は『名媛詩歸』の中で、頷聯について、「『影鋪』兩句、俱に妙なるは、神氣靜かにして、語氣朗らかなるに在り」と述べている。また、この詩の尾聯末尾に用いられる「愁」の語は、魚玄機の詩の中に頻出するものであるがその詳細は第三章で論じたい。

それはともかくも、鷗外は『魚玄機』の中において、ここぞと思われる所に魚玄機の詩を點綴して、彼女の心情の曲^{くま}までを描き盡そうとしている。一方、『寒山拾得』は三島由起夫が『寒山拾得』は、東洋の古い神仙譚であるが、それにとどまらず、深い暗示的手法によって、終結部で超人的な世界を急激に讀者の目前にひろげ、その世界を垣間見たと思ふときに、小説は終つてしまふ」と語っている⁹⁾ように、結末の部分で寒山の悟入の境地が現出されるのであるが、鷗外はこの作品の中で、寒山の詩を用いずにその悟入の境地を語っているのである。換言すれば、鷗外は魚玄機の心境をひたすら語ることによって語り、寒山の心境をひたすら黙することによって語っているのだと言えよう。兩作品の間にはまた、語と黙との対照もあるのである。

さて、『魚玄機』と『寒山拾得』に関して、今一つ対照的な事柄は、『魚玄機』が長期の綿密な用意によって書かれたものと見られるのに対して、『寒山拾得』は極めて短期に一气呵成に書かれたと見られることである。

『魚玄機』は既に述べたように大正四年（1915）の脱稿であるが、鷗外が魚玄機の詩集を歌人の佐佐木信綱氏より贈られたのは、ずっと以前で、明治三十七年（1904）二月十日付の同氏宛の書簡には、「御寵贈ノ詩集今日一読仕候。ソノ付録ヲ見レバ、作者ハ別品ニテ女道士兼芸者トイウヨウナ人物ナルニ、ソレガマタ嫉妬デ別品ノ女中ヲ毆チ殺シ、獄ニ下リタリトアリ、実ニ芝居ニデモアリソウナ珍事ニテ面白ク存ジ候。」と述べているから、ほぼ11年程の間、このテーマが鷗外の心の中で温められていた事が知られる。これに対して、『寒山拾得』は、鷗外が『寒山拾得縁起』の中で、「私はちょうどその時、何か一つ話を書いてもらいたいと頼まれていたので、子供にした話を、ほとんどそのまま書いた。いつもと違って、一冊の参考書をも見ずに書いたのである」と言っており、その一气呵成の作である事が推測される。斎藤茂吉は、同じ作家としてのライバル意識

もあったのであろうか、これに対してかねて疑問を抱いていたようであるが、一日それが氷解した時の事を次のように書いている。「この黄金をのべたやうな、荘厳の気をおこさせるやうな好短篇が、作者のいふやうに、一気に書けるものかどうかといふ疑もないことがなかった。然るに昭和十一年四月になって、計らずも作者の日記を見せてもらふ機縁があった。……（中略）（その日記の大正四年）十二月五日の條に、『高瀬舟を草し畢る』とあり、十二月六日の條に、『高瀬舟を瀧田哲太郎に付与す』とあり、十二月七日の條に、『寒山拾得を草し畢る』とある。さうして見れば、役所から帰られてから、一晚或いは二晩で草し畢られたことが確実である。嗚呼、燕雀は、私で、鷗外は鴻鵠であった⁷⁾」と。このように、『寒山拾得』は誠に一気呵成の作であったのである。鷗外は、寒山の詩をそれ以前に熟知していたのであろうが、一転、『寒山拾得』は、仏教の悟りの境地を端的に表現する作となった。綿密な用意と一気呵成、これも『魚玄機』と『寒山拾得』の対照的な点である。

第二章 魚玄機と道教

さて、本章では、魚玄機と道教との関わりについて述べる。第一章に引用した鷗外の『魚玄機』の冒頭部分における唐代の道教についての記述は、ほぼ正確で、魚玄機が咸宜觀の女道士であったことも事実である。

但、鷗外は、道教との関連で種々の虚構をなしている。その甚しい例は、次の下りである。

当時道家には中氣真術というものを行なう習いがあった。毎月朔望の二度、あらかじめ三日の齋^{もひみ}をして、いわゆる四目四鼻孔うんぬんの法を修するのである。玄機はのがるべからざる規律のもとにこれを修すること一年余にして忽然悟入するところがあった。玄機は真に女子になって、李の林亭にいた日に知らなかった事を知った。これが咸通二年の春の事である。

実は、これは、魚玄機のことではなく、鷗外は別のモデルの話を組み入れている。そのモデルとは、『魚玄機』の書かれた当時の女性解放運動の旗手、青踏社の平塚雷鳥（明子）である。それは再び斎藤茂吉の言を借りれば、「（『魚玄機』が書かれた）丁度そのころ、平塚明子さんが、花のやうな處女時代を通過して、忽然として悟入した感覚のことを自分の文章で告白してゐた。⁸⁾」ということであり、それを鷗外が小説に組み入れたのである。

ところで、『魚玄機』もその範疇の中に入れられている歴史小説については、在来、日本において様々な議論がなされている。

鷗外自身が歴史小説についての立場を告白しているのは、有名な「歴史其儘と歴史離れ」であり、そこでは、鷗外は、まず、歴史の「自然」を尊重する姿勢について、次のように書いている。「なぜさうしたかと云ふと、其動機は簡単である。わたくしは史料を調べて見て、其中

に窺はれる『自然』を尊重する念を発した。そしてそれを猥りに変更するのが厭になった。これが一つである。わたくしは又現存の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思った。これが二つである。⁹⁾」しかし、一方で、鷗外は、その歴史の『自然』に呪縛されるのを嫌った。彼はまた、次のようにも言っている。「わたくしは歴史の「自然」を変更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしは此縛いましめの下に喘ぎ苦んだ。そしてこれを脱せようと思った。」

菊池寛は、早く、この鷗外の歴史小説について、「鷗外さんの歴史小説は、その手法も題目も、あくまでリアルである。決してウソを書かない。鷗外氏以後に出た歴史小説は、芥川氏のものにしろ、自分のものにしろ、虚構がある。」と述べている¹⁰⁾。これは、鷗外の歴史小説が、史料の中に窺われる歴史の「自然」を尊重している点に注目したものであろう。鷗外のこの議論を受けて、石川淳はまた、次のように言ってもいる。「自然を尊重するとは、史料の中に没頭して精神を見うしなふことであつてはならない。歴史上の諸事件をつらぬくものは人間精神の運動である。その運動の具体的意味を知る手がかりとして後世に伝へられるものは、随時に発見採集されるところの部分的な史料しかない。われわれが虚心に丹念に史料をあつかはなくてはならぬとは大切なものを逃がさないための用心である。精神は光のやうなもので、これより速いものはないので、影は文学の中にしか残らない。いはゆる史料は現象記録である。ひとがそこに精神をつかまへたとき、史料は生動するであらう。¹¹⁾」誠に堂々の議論であるが、鷗外が歴史小説よりも「虚心に丹念に史料をあつか」った史伝小説は、一面、斎藤茂吉に言わせれば、「一口にいえば、渋江抽斎以下の文は、生前も、歿後も、文壇の一流創作家等によつて、余り読まれてゐないといふことも、一つの特色をなして居る。¹²⁾」のである。

従って、歴史小説は、余りに歴史に近づくことによって、歴史記述そのものになって行くのであって、鷗外が歴史の「自然」に呪縛されるのを嫌って、歴史離れを主張した所以もそこにあるのであろう。そしてまた、作家の虚構の入り込む余地もそこにあるのである。けれども、一方、服部之総氏が歴史を知らない歴史文学の横行に対して「だが、ここで云いたいのは、歴史家の歴史文学批判が今後もっとさかんに、全面的に、すべての作家と作品にわたって行われてほしいということである。」と述べている¹³⁾ように、歴史離れをし過ぎた「歴史小説」は最早、「歴史」の名を冠するに値しないのは当然であらう。つまり、桑原武夫氏の説くように「歴史小説はそこに描かれるべき過去の一時代の生き生きとした感覚なくしては成立しない筈である。そして生き生きとした感覚をつかむためには、作者がその時代に対する相当正確な知識をもっているの でなければならない¹⁴⁾」のである。

以上、歴史小説に関する在来の議論の一端を見てきたが、これらを踏まえて、『魚玄機』と『寒山拾得』について考えると、これらが、「その時代に対する相当正確な知識」によって書

かれたと言うことは矢張り認めて良いであろう。それは、それぞれ、晩唐と初唐にあっても良き・さうな話である。しかし、鷗外の他の歴史小説、例えば、「大塩平八郎」などが、鷗外の歴史観による制約を受けているように、『魚玄機』と『寒山拾得』は、鷗外の宗教観の強い制約の下にあると思われる。一般に明治以降、昭和の初め（1868-1930）までの日本の道教研究は、儒教・仏教と違って日本人には未知な部分の多かった道教を異端的なものとし、儒教・仏教の正統に対立するものと考え、また、道教を好奇の対象として取り扱う研究が多かった¹⁵⁾が、鷗外の道教観もまた、この時代の日本人の道教観を良く反映しているものである。また、鷗外は、「歴史其儘と歴史離れ」の中で、「わたくしの作品は概して dionysisch (ディオニソスの)¹⁶⁾でなくつて、apollonisch (アポロンの)¹⁶⁾なのだ。」と言っているが、『魚玄機』は正に dionysisch な作品であって、apollonisch な作品の『寒山拾得』とこの点でも対照的である。恐らく、鷗外は道教を異端的なものとして好奇の対象とし、また、その中に dionysisch なものを見ていたのであろう。

ところで、鷗外は歴史小説を書く場合、史料の中に窺われる歴史の「自然」を尊重すると言ったが、『魚玄機』の場合の史料の内実はどうのようなものであったのか、道教関係の事柄を視座の中心に据えつつ、次に中国関係の史料の検討に移ろう。

『魚玄機』が書かれる際に鷗外が依拠した中国関係の史料については、『魚玄機』の末尾にリストが掲げられている。「参照」として挙げられているリストは「その一」として魚玄機関係のものを、『三水小牘』『太平広記』『続談助』『唐詩紀事』『全唐詩話』『南部新書』『北夢瑣言』『唐才子伝』『全唐詩(姓名下小伝)』『唐女郎魚玄機詩』、「その二」として温飛卿(庭筠)関係のものを、『旧唐書』『新唐書』『全唐詩話』『唐詩紀事』『六一詩話』『滄浪詩話』『彦周詩話』『三山老人語録』『雲浪齋日記』『漁隱叢話』『北夢瑣言』『桐薪』『玉泉子』『南部新書』『握蘭集』『全箏集』『漢南真稿』『温飛卿詩集』と連ねている。この内、魚玄機関係の十種について検討する。

魚玄機関係の十種の史料のうち、『全唐詩話』と『唐女郎魚玄機詩』の外の史料は、既に西村富美子氏に指摘のある通り、¹⁷⁾ 鷗外が読んだと推測される魚玄機の詩集のテキスト、清の葉德輝の観古堂彙刻書所収の『唐女郎魚玄機詩』の末尾に附録として葉德輝の考証も含めて掲載している史料を踏襲したのに過ぎないものである。但、奥野信太郎氏の説¹⁸⁾の如く、鷗外はこれを綿密に考証したらしい。

ところで、リストの最初に掲げられる『三水小牘』『太平広記』『続談助』は、全く別の史料ではなく、唐の皇甫枚の伝奇小説『三水小牘』が、宋の太平興国年間(976-984)に李昉等によって編輯された、漢から五代までの小説集『太平広記』と宋の晁載之の随筆『続談助』の双方に引用されていると言う関係に立つ。そして、この『三水小牘』の伝記が、魚玄機の伝記

の中で最も古いのである。しかし、唐の皇甫枚の『三水小牘』の原書は既に失われており、現在のテキストは葉德輝が言う通り「三水小牘の近世伝うる所はみな輯本なり¹⁹⁾」という状況である。したがって、『太平広記』と『統談助』は『三水小牘』の引用文として、一見、同じ重みを持つと見られるが、この二つは広略甚しい懸隔が存する。以下、やや煩雑となるが、『太平広記』巻百三十、報応類の緑翹の条と、『統談助』巻三の『三水小牘』の全文を示す。

『太平広記』緑翹の条

- (1) 唐西京咸宜觀女道士魚玄機、字幼微、長安里家女也、色既傾国、思乃入神。
(A)
- (2) 喜讀書屬文、尤致意於一吟一咏、破瓜之歲、志慕清虛、咸通初、遂從冠帔于咸宜、而風月賞翫之佳句、往往播於士林、然蕙蘭弱質、不能自持、復為豪俠所調、乃從游處焉、於是風流之士、爭修飾以求狎、或載酒詣之者、必鳴琴賦詩、間以謔浪、槽学輩自視默然、其詩有綺陌春望遠、瑤徽秋興多、又殷動不得語、紅淚一雙流、又焚香登玉壇、端簡禮金闕、又雲情自鬱爭同夢、仙貌長芳又勝花、此數聯為絕矣。
- (3) 一女僮曰綠翹、亦明慧有色、忽一日、機為鄰院所邀。
(B)
- (4) 將行、誠翹曰、無出、若有客、但云在某處、機為女件所留、迨暮方媼院。
(C) (C)
- (5) 綠翹迎門曰、適某客來、知鍊師不在、不舍轡而去矣、客乃機素相暱者、意翹与之私、
(D) (D) (D)
及夜、張燈扃戶。
(D)
- (6) 乃命翹入臥内訊之、翹曰、自執巾盥數年、實自檢御、不令有似是之過、致忤尊意、且某客至款扉、翹隔闔報云、鍊師不在、客無言策馬而去、若云情愛、不著於胃襟有年矣、幸鍊師無疑、機愈怒。
- (7) 裸而答百數、但言無之。
(E)
- (8) 既委頓、請盃水酌地曰、鍊師欲求三清長生之道、而未能忘解珮薦枕之歡、反以沈猜、厚誣貞正、翹今必斃於毒手矣、無天則無所訴、若有、誰能抑我疆魂、誓不蠢蠢於冥冥之中、縱爾淫佚、言訖。
- (9) 絕于地、機恐、乃坎後庭瘞之、自謂人無者、時咸通戊子春正月也。有問翹者、則曰、春雨霽逃矣、客有宴于機室者、因搜於後庭、當瘞上、見青蠅數十集于地、驅去復來、詳視之、如有血痕且腥、客既出、竊語其僕、僕媼、復語其兄、其兄為府街卒、嘗求金於機、
(F) (F) (F) (F) (F)
機不顧、卒深銜之。
- (10) 聞此、遽至觀門覘伺、見偶語者、乃訝不覩綠翹之出入、街卒復呼數卒、携錘具。突入玄機院斃之、而綠翹貌如生、卒遂錄玄機京兆、府吏詰之辭伏、而朝士多為言者、府乃表列上、至秋竟戮之、在獄中亦有詩曰、易求無價寶、難得有心郎、明月照幽隙、清風開短襟、此其美者也。
(G) (G) (G)

『統談助』巻三、魚玄機の条

西京咸宜觀女道士魚玄機、字幼微、長安倡家女也、色既傾国、思乃入神。畜一女僮、曰綠(a)、(b)翹、一日機為鄰所邀、莫婦、翹曰、適某客來、知鍊師不在、已去矣、客乃機素相匿者、意翹与之私、及夜扃戶、裸而答之、絕于地、機恐、坎後庭、瘞之、時咸通戊子春正月也、客有宴于機室者、因溲于後庭、當座上、見青蠅數十驅去復來、詳視之、如有血痕、客出語其僕、僕兄為府衙卒、常求金于機、機不顧、卒深銜之、聞之呼數卒、携錘突入玄機院、笞之、而綠翹兒如生、遂錄機詣京兆府、朝士多為言者、府乃表列上、至秋竟戮之、在獄亦有詩曰、易求無價寶、難得有情郎²⁰⁾。

このような煩雑な対照を行なう理由の一つは、『三水小牘』の魚玄機に関する記事について、西村富美子氏の如く、「最低の必要事項のみ記した『統談助』の方が、原型に近いものであり、『太平広記』の方は、後日誰かの手で話の具体化、面白味を強化するために、詩人としての面を語る挿話を追加し、高名な女流詩人の犯罪ということに、事件の内容を手直したものと考えられる。²¹⁾」と論じる方がいるからである。

但、西村氏の議論は、必要最低限の記事は原型であり、話を具体化し、面白味を強化したものは発展型であるという、極めて常識的な論理以外は用意されていないようである。

しかし、『太平広記』所引のものと『統談助』所引のものとを対照すると、『統談助』の記事は、若干の補足的な言葉と文字の異同を除けば、全く「太平広記」の記事を出ていないことが直ちに確認できよう。従って、西村氏とは全く逆に、『太平広記』所引の記事が原型で、『統談助』の記事がその節略型であると看做すことも可能なのである。具体的な面白い事柄は、必ず、後から附加されるという論理が一般的に成立しないのは言う迄もない。

けれども、これだけでは水掛論に終わる可能性があるので、次に西村氏が検討されなかった『三水小牘』と作者皇甫枚について考察してみよう。

『三水小牘』は、唐の皇甫枚の撰で、宋の陳振孫の『直齋書録解題』の小説類に、はじめて「三水小牘三卷」が掲載される。その後、明の楊儀に二巻本があり、姚咨が嘉靖年間に、それを写し、奉汴が印刷した。『天一閣書目』に載せられる二巻本がそれで、清になると盧文弨がそれを刻して『抱經堂叢書』に入れ、また阮元が錢會の影写による姚本に提要をつくっている。そして、近人の繆荃孫が盧文弨の刻本と『太平広記』『統談助』『説郛』『説海』を校勘し、また逸文十二カ条を合わせ、『雲自在龕叢書』に二巻本として入れている²²⁾。この本の内容については、阮元の「三水小牘二巻提要」では、「神仙靈異の事に涉ると雖も、筆は雅びに詞は明らかにして、実に垂戒を寓す」と述べており²³⁾、「神仙靈異の事」を説くのを特徴と見ている。また、近人の汪辟疆は『唐人小説』の中で、「今、細にその書を繹ぬるに、多く仙靈怪異を紀すと雖も、しかも毎に義烈に及び、またまた凜凜として生氣あり」と言う。つまり、この『三水小牘』の特徴は、「神仙靈異の事」、つまり、道教などの神怪な事と、「生氣」溢れる記述を特徴

とするのである。『三水小牘』は言うまでもなく、袁郊の『甘沢謠』裴鉞の『傳奇』、薛用弱的『集異記』と並び称される晩唐時代の傳奇小説集であり、『三水小牘』の中では、「飛烟伝」が名作として知られる物語である。そして、そこでは、「神仙」「三清」「十洞」「仙馭」等の道教的辞句が跳梁をする。

ところで、先に煩を厭わず『太平広記』の緑翹の条と『統談助』の引用の全文を掲げた今一つの理由は、『太平広記』の引用文に、多く道教的辞句が用いられているからである。そして、この点と、「生氣」ある、つまり、具体的で面白味を有する記述において、『太平広記』所引の緑翹の条は、「飛烟伝」はじめ、『三水小牘』の他の名作と共通性を有するのである。従って、上来の行論に大過ないとすれば、魚玄機の伝記の初出である『三水小牘』の文は、『太平広記』所引のものが皇甫枚執筆の原型で、『統談助』の方はその節略型と断じて良いであろう。

『三水小牘』の作者皇甫枚は、字を遵美といい、三水（今の陝西省旬邑県）の人で、唐の懿宗の咸通12年（871）には、長安の蘭陵里に居り、咸通末年に汝州の魯山令となり、咸通14年（873）、汝州から奉に入り、光啓中（885-888）、僖宗が梁州に居た時、その行在所に赴き、その在世は唐末から五代（晋の天祐七年<910>頃）にも及んだことが知られる。

そして、『三水小牘』では、「従諫」「矜兒」の篇において、咸通七年、咸通八年の洛陽での記事を載せ、「温京兆」「趙知微」では、咸通12年、13年の記事を載せている。それらの記事は、恐らく、皇甫枚が親しく見聞をしたものであると解されるが、さすれば、咸通9年（868）の魚玄機の事件も、皇甫枚が長安において親しく見聞したことを記事にしたものではあるまいか。

つまり、「太平広記」に引用される魚玄機の逸事は、その時、まさに長安にいた皇甫枚によって記されたものと考えられるのであって、それが「生氣」あるものとなっているのは当然のことなのである。

ところで、言うまでもなく、唐代の傳奇小説は、六朝の志怪小説と相違して、作者の意識的な虚構（フィクション）が用いられた点が特筆されるが、しからば、皇甫枚の魚玄機についての記事には多く虚構が含まれるのであろうか。この点を解明するには、皇甫枚の著述に対する姿勢を検討しておく必要がある。そうした際、皇甫枚が、自身で「以余有春秋学、命筆削以備史官之闕」（<上官は>私に『春秋』の学問があるので、史料を書くべき点は書き削るべきところは削らせて、歴史官の記述の關けている点を完全なものにさせた）と語っていることが注目されるであろう。つまり、皇甫枚は、徐士年氏が、『唐代小説選』の注でいうように、「皇甫枚的藝術風格、從《三水小牘》的大部分来看、他是偏重“史才”的」と述べるように、自身の歴史家としての才能を尊重していたのである。「飛烟伝」とともに、その名を知られる、「温京兆」、京兆尹（長安の長官）温璋の逸事は、やはり、「黄冠」「真君」「青童」などの道教

的辞句を包含する「生氣」ある好篇であるが、それは、先に述べたように、皇甫枚の見聞をそのままに記したもののように思われる。しかし、一方、皇甫枚は伝奇小説作家として知られており、その才能は「飛烟伝」において如何なく発揮されている。

言うならば、皇甫枚もまた、歴史家と伝奇小説作家として、「現実其儘と現実離れ」の中で揺動した作家であり、その中で、『太平広記』所引の魚玄機の逸事は、他の『三水小牘』の大部分の作品とともに、自己の見聞を「現実其儘」に記した作品であろうと見られるのである。

さて、『太平広記』所引の『三水小牘』に依れば、魚玄機は、「破瓜之歳、志慕清虚」とある通り、十六歳の頃、道教の「清虚」の境地を慕う気持が起こしたと言う。そして、「威通初、遂従冠帔于威宜」と述べるが如く、懿宗の威通年間の始め（860頃）長安の威宜観に女道士となって入った。威宜観は、長安の親仁坊にあった女性の為の道観で、その由来については、宋の宋敏求の『長安志』巻八に次のように記される。

睿宗在藩之第、明皇升極於此、開元初置昭成・肅明二皇后廟、謂之儀神廟、睿宗升遐、昭成遷入太廟、而肅明留於此、開元二十一年、肅明皇后、亦祔入太廟、遂為肅明道士觀、宝応元年、威宜公主入道、與大真觀換名焉。

これに依れば、威宜観は、睿宗の故宅であったものを、開元21年（733）に道士の為の肅明観と為し、宝応元年（762）威宜公主の入道とともに女冠（女道士）の為の威宜観と改称されたものである。

そして、宋の錢易の『南部新書』に依れば、

長安士大夫之家、入道盡在威宜。

とあるから、長安のインテリゲンチヤの家庭で、女性が道教に入信する場合はすべて威宜観に入った模様である。

さて、威宜観に入った魚玄機は、一院を与えられ、道教修行を行なった。『三水小牘』が名句として引用する、

焚香登玉壇　香を焚きて玉壇に登り
端簡禮金闕　簡を端ただして金闕に礼す

の一聯は、道観での魚玄機の生活の一齣を表わすものであるが、そこで、「玉壇」つまり玉の祭壇と対をなしている「金闕」とは、辛島氏が言われるような「金」の「宮城の門」ではなくて、道教で言う、老子が變化した神格で、『太平経』と深く関わる「金闕後聖帝君」の像を指すのではあるまいか。そして、この一聯の意味は、「香を焚いて美しい玉の祭壇に登り、簡しやく（笏のこと）を端ただしく持って金闕帝君の像に敬礼する」と言うことであろう。

そうした折節、「清虚」（欲望を去った清らかな心境）を求めて入道した魚玄機は、

道性欺冰雪　道性　冰雪を欺き

禪心笑綺羅 禪心²⁴⁾ 綺羅を笑う(「酬李郢夏日釣魚回見示」)

(道教で説く人間の本性の清浄さは氷や雪を欺くかのようにであり、禪定により静まりかえった心は、綺羅の華やかさを笑うのである)

と言う語句に窺えるような道教の悟りの境地を垣間見るのであるが、その結末は、嫉妬に狂い、侍女を殺す愚行を犯してしまうのである。緑翹が死の直前に発したという

鍊師欲求三清長生之道、而未能忘解珮薦枕之歎。(鍊師 三清長生の道を求めんと欲するも、未だ解珮薦枕の歎を忘るる能わず)

なる批評が、道教の悟りの境地を求めながら、遂にはそれが出来なかった魚玄機の心情を最も良く表現している。

因みに、「解珮薦枕の歎」とは佩玉^{おびだま}を解き佩を薦める歎びという事で、男女の交情の歎びを言う。

また、鍊師とは、本来は、「唐六典」に、

道士修行有三号、其一日法師、其二曰威儀師、其三曰律師、其德高思精、謂之鍊師。

と説くように、徳行高く、思索精なる道士に与えられる称号であるが、魚玄機に冠せられているのは、道教修行者に対するやや一般的な称呼としてであろう。

更に、「三清」とは、初唐の孟安排の道教教理書『道教義枢』に依れば、『太真科』を引用して次のように言う。

太真科云、三天最上、号曰大羅、是道境極地、妙氣本一、唯此大羅、生玄元始三炁、化為三清天也、一曰、清微天玉清境、始氣所成、二曰、禹餘天上清境、元氣所成、三曰、大赤天太清境、玄氣所成。

また、同じく初唐の潘師正もしくはその弟子の手になると言う『道門經法相承次序』では、三清境、従下第一大赤天、第二禹餘天、第三清微天

右已上名无上三天、皆是證果極地。

と述べている。

従って、「三清」とは、道教修行者が悟りを開いて昇る所の仙境、即ち、清微天玉清境、禹餘天上清境、大赤天太清境を言うのであるが、魚玄機は「清虚」なる心を守って、その仙境において永遠の生を得ることは遂に出来なかったのである。

第三章 魚玄機の愛の詩

さて、佐藤春夫は『車塵集』の中で、魚玄機の詩を一首だけとっている。「秋怨」と題する原詩をまず掲げよう。

自歎多情是足愁 自ら歎ず多情は是れ足愁なるを

況當風月滿庭秋 況んや 風月 庭に滿つるの秋に當るをや
洞房偏与更聲近 洞房偏えに更聲と近し
夜夜燈前欲白頭 夜夜燈前に白頭ならんとす

この詩を佐藤春夫は次のように訳している。

秋ふかくして

わかきなやみに得も堪へで

わがなかなかに頼むかな

今はた秋もふけまさる

夜ごとの鬨なげに白しろみゆく髪

また、那珂秀穂氏は同じ詩を次のように訳される²⁹⁾。

戀する身とはなるなかれ

庭に月澄む秋はなほ

時計の音の身にしみて

幾夜むなしく泣き明しけむ

次に拙訳も。

うづく情の 遣る瀬こころなさ

まして月影 滿つる秋

洞房ねに時計の 音も近く

夜の灯よともびに 白さ増す髪

この詩に代表されるように、魚玄機の詩には、遣る瀬ない心境を表現する「愁」の語が多用される。

清の黄周星の『唐詩快』は、魚玄機、上官昭容等の閨秀詩人に関して次のように言う。

嗟乎！ 世間至難得者、佳人也、若佳人而才、豈非難中之難？ 乃往往佛鬱流離、多愁歎
歎、甚至横被刑戮、不得其死。

この「愁多く歎すくなび歎すくない」詩人をその作品に鑑みて挙げれば、魚玄機に最初に指を屈する事になろう。

その「愁」は、一まずは「相思」と「郷思」、即ち、「男性への思い」と「故郷への思い」において発せられると見て良い。

例えば、愛人李子安に寄せる詩では次のように「相思」を歌い、

江南江北愁望 江南江北愁いつつ望む

相思相憶空吟 相思相憶空しく吟う

《漢江を隔てて（李）子安に寄す》

また、「郷思」は

郷思悲秋客 郷思 秋客を悲しみ
愁吟五字詩 愁いて五字の詩を吟う

《友人を期^まつも雨に阻まれて至らず》

の如く歌われるからである。

しかし、『三水小牘』に、「色は既に国を傾け、思いは乃ち神に入る」と言われ、また、宋の銭易の『南部新書』では、「篇^{たぐひ}什に工なり」と言い、また、宋の孫光憲の『北夢瑣言』では、「甚だ才思あり」と言われる、絶世の美女にして、入神の詩想と巧緻な詩才を有した女流詩人魚玄機の心の大半を占領したのは「相思」つまりは「男性への思い」であった。それは、例えば、最も直截的な題を有する「閨の怨み」の作でも

春来秋去相思在 春来り秋去り相思在り
秋去春来信息稀 秋去り春来るも信息稀なり

と歌われているからである。

この「愁」の詩人魚玄機は、また、「情」の語を多用する。そして、その中で、注目に価するのは、「多情」と「含情」である。

「多情」は男女の情の強さを表現し、「含情」は男女の情を遂げようとしつつ、それをこらえている状態を言う。「多情」は「秋怨」の詩では、魚玄機自身についての告白であったが、他の三例は、もっぱら、男性の側についての表現である。例えば、「人に和す」の詩では次のように言う。

多情公子春留句 多情の公子 春 句を留め
少思文君晝掩扉 少思の文君 晝 扉を掩う

これに対して、「含情」は、例えば、「寓言」の詩では、次の如く用いられる。

楼上新妝待夜 楼上 新妝して夜を待ち
閨中獨坐含情 閨中 獨坐して情を含む

そして、「多情」と「含情」を魚玄機に引きつけて言えば、「多情」な彼女が、男女の情を遂げようとしてこらえている状況、「含情」の状態にあるからこそ、多く、「愁」は発せられるのであろう。

この「含情」に対して男女の情を解放する状態が「放情」であり、その「放情」の前には、道教において、元来、純白な人間の本性を養う修行、即ち、「養性」を遂げて「無心」、つまりは悟りの状態になることはしりぞけられ、返って、その情愛の苦悩の海に沈むことが、魚玄機によって選ばれるのである。「愁思」の詩では、それを次のように歌う。

放情休恨無心友 放情 恨むこと^な休し無心の友

養性空抛苦海波　養性　空しく抛うつ苦海の波

もっとも、この「養性」の結果として獲得される安寧の境地、また、その安寧の境地を獲得した道教修行者の住む仙界のイメージが魚玄機になかったわけではない。「光威竄姉妹三人小孤、而始妍乃有是作、精粹難儔、雖謝家聯雪、何以加之、有客自京師來者、示予因次其韻」には次のように言う。

小有洞中松露滴　小有洞中　松露滴り
大羅天上柳烟合　大羅天上　柳烟含む

「大羅天」は、先の「三清」の説明の折の『道教義枢』の引用からも察せられるように、「三清」の上にある道教の最高の仙界のこと。「小有洞」は王屋山にあるとされる仙界。王屋山は道教の古来からの聖地であり、盛唐時代の茅山派道教の宗師、司馬承禎——彼は玄宗皇帝の信任を受けた唐代有数の道士であるが——の活躍した所である。この司馬承禎には道教の福地について記した『天地宮府図并序』が存するが、そこではまず十大洞天について次のように言う。

太上曰、十大洞天者、處大地名山之間、是上天遣群仙統治之所。

そして、この十大洞天の筆頭に挙げられているのが王屋山の「小有清虚の天」である。この『天地宮府図并序』では、次のように言う。

第一王屋山洞

周廻萬里、號曰小有清虚之天、在洛陽河陽兩界、去王屋縣六十里、屬西城王君治之。

この王屋山は魚玄機にとって思い出深い地であつたらしく、「左名場、自沢州至京、使人伝語」の詩には、次の如くに歌う。

閑居作賦幾年愁　閑居して賦を作す　幾年の愁
王屋山前是旧遊　王屋山前　是れ旧遊
詩詠東西千嶂乱　詩は詠ず　東西　千嶂乱れ
馬隨南北一泉流　馬は隨う　南北　一泉流る

この思い出の王屋山にある道教の聖地、「小有洞」、魚玄機の仙界のイメージは、手近くは、この「小有洞」に結ばれ、それに道教の最高の天界「大羅天」が重なり合わさっていった。しかし、それは、松露の滴り落ち、柳の葉が烟けむりのように揺れ動く、豊かな自然の美を見た所であつた。

また、「鍊師に寄題す」では、悟りを開いた道士の姿を次のように華麗に描き出す。

霞綵剪為衣　霞綵　剪りて衣と為し
添香出繡幃　香を添えて繡幃を出づ
芙蓉花葉□　芙蓉　花葉……

山水帔□稀 山水 帔□ 稀なり
駐履聞鶯語 履を駐めて 鶯の語るを聞き
開籠放鶴飛 籠を開いて 鶴の飛ぶに放す
高堂春睡覚 高堂 春睡より覚むれば
暮雨正霏霏 暮雨 正に 霏霏たり

霞の綵衣を着て、繡りカーテンを香を漂わせて出入し、美しい山水の自然の中、芙蓉の花葉の輝きに囲まれ、鶯の囀りを聞き、白鶴の空に舞うを目にする、そのような超俗の道士は、魚玄機にとって憧れの対象ではあった。。

けれども、魚玄機にとって、その仙界や道士や道教の様々な書籍は、所詮は彼女の心を満たすものではなかった。やはり「愁思」の詩で歌う、

長者車音門外有 長者の車音 門外に有り
道家書卷枕前多 道家の書卷 枕前に多し

の詩句は、魚玄機の「愁」の前に、道教經典の教えが如何にも無力なものとして詠じられているのが知られる。

ところで、魚玄機がその詩の中で、自己の感情を表現する言葉として、「愁」の語に継いで頻繁に用いるのは、「恨」である。

この「恨」は、例えば、自分が男性に生れたならば、科挙の進士の試験に合格して文名を馳せたらうと、女性として羅衣に身を覆う運命に対する「恨」²⁶⁾ みとして歌われる場合もある。

「遊崇真觀南樓、曙新及第題名処」の詩に、

自恨羅衣掩詩句 自ら恨む 羅衣の詩句を掩うを
舉頭空羨榜中名 頭を挙げて空しく羨む榜中の名

とあるのがそれである。

元の辛文房の『唐才子伝』では、魚玄機にこの詩句のあるが故に、「その志意の激切なるを観るに、一男子たらしめば、必ず有用の才あらん」と魚玄機が男性に生まれなかった事を惜んでいる。

因みに、ここで、科挙の合格者の発表を行なった崇真觀は、やはり、長安にあった道觀で、その場所は、東の城壁に近い新昌坊の一隅に位置した。

宋の宋敏求の『長安志』第九には、

崇真觀

本、李齊の古宅、開元の初め立つ

と記されている。

ところで、魚玄機の詩の中では、また、他の詩人の亡くなった妻を悼む詩、即ち「悼亡詩」

に模倣する作品の中で「恨」の字が用いられる。これも、矢張り、運命の最たるもの、「死」に対する「恨」みとして歌われているものである。例えば、「代人悼亡²⁷⁾」と題する詩では

西山日落東山月　西山に日落ち　東山に月
恨想無因有了期　恨みつつ想い　了る期あるに因なし

と語るのがそれである。

しかしながら、魚玄機は更にまた、自身を待たしておきながら、いっかな姿を見せぬ男性への「恨」みとしても、「恨」の語を用いて詩を詠ずる。「感懷奇人」の詩の中で、

恨寄朱弦上　恨みは寄す朱弦の上
含情意不任　情を含むも意任せず

と思うままに交情の遂げられぬじれったさを琴に託すその魚玄機の心の中には、やはり、運命^{きんめい}に対する「恨」みが籠められていると見て良いようである。

さて、魚玄機の愛の対象として、鮮明にその詩の中に登場するのは、「李子安」であるが、『三水小牘』では、特定の愛人の名を説かず、宋の孫光憲の『北夢瑣言』に至って次のように説いている。

（魚玄機）咸通中、為李億補闕執箕帚、後愛衰下山、隸咸宜觀為女道士、

魚玄機は咸通年間に補闕の位にあった李億の愛人となり、後、李億の愛が衰えて山を下り、咸宜觀に所属して女道士となったというのがこの『北夢瑣言』の説くところであるが、この『北夢瑣言』の所説を本として、『全唐詩』の小伝では、魚玄機は李億の妾となったとか、『唐才子伝』では、李億の夫人の嫉妬が原因で魚玄機が女道士となったのであるとか述べているが、これは全て確たる証拠があっての事ではない。つまり、「李子安」の「子安」は、いかにも「字」らしいが、この「李子安」の名が「億」である実証はどこにもないのである²⁸⁾。従って、森鷗外が魚玄機の最初の愛人を「李億」としているのは、『北夢瑣言』等の説に依っているのが、史実であるか疑わしい。

しかし、魚玄機に「愁」の感情をあれ程までに詩句に盛り込ませたのは、確かに李子安との交情に依るところが多いのであろう。

魚玄機の詩の師匠が温庭筠²⁹⁾であったことは、魚玄機の最初の愛人が「李億」であったと言うことに比較すると、より真実味がある。それは、魚玄機の詩の中に、温庭筠、飛卿に贈った詩が二つ存するからである。そして、その中の「冬の夜、温飛卿に寄す」の詩の次の一聯、即ち、

滿庭木葉愁風起　滿庭の木葉　風起こるを愁い
透幌紗窗惜月沈　透幌の紗窗　月沈むを惜しむ

の二句は、魚玄機の「愁」の心の風景をその儘に映し出しているかのようである。

魚玄機の詩については、『明本唐百家詩……唐女郎魚玄機詩集題跋』では、

玄機、善吟詠美風調、雖未免涉于多情、而幽柔融雅、有足悲焉。

と言い、また、明の徐獻忠の『唐詩品』では、

其詩婉蒨悲悽、有風人之調、

と言い、更には、元の辛文房の『唐才子伝』では、

尤工韻調、情致繁縟

とも言われている。

その詩は、これらの評価が示すように、韻律の調和した、「幽柔融雅」（静かでもの柔かでもろけるように雅やか）でありながら、一方で、「婉蒨悲悽」（しなやかで鮮やかで悲しげで悽しげ）であり、その「情致」即ち、情趣は、「繁縟」（複雑で飾りが多い）とも見られるのであるが、他面、その詩に籠められている心情に立ち入ると、「愁」の一字に収斂されて行く趣きがあるのである。

魚玄機の「愁」は、李子安と別れてあるとき、刻々と新たに湧き起こる。例えば、「国香に寄す」の詩では、

山捲珠簾看 山は珠簾を捲いて看るに

愁随芳草新 愁は芳草に随って新たなり

と説くのが、その間の事情を良く語っていよう。

明の高樞の『唐詩品彙』では、南宋の劉克莊の『後村詩話』の次の魚玄機評価を取り挙げている。

劉言史の「成鍊師に贈る」の詩に云う、「大羅 過却すること三千歳なるに、更に人間に向いて阮郎に魅せらる」これ女道士なり。豈れ魚玄機の流か。

その言う所は、道教の最高の仙界において三千年も過ごして来ながら、人間世界において男性に魅せられてしまう。この女道士は、魚玄機の類であろうかとの意味である。

緑翹に殺した罪により、牢獄に下った魚玄機は、その獄中であって、なお、李子安の事を思つて詩句を綴る。次の詩は、或いは、「贈鄰女」と題し、或いは「寄李億員外」と題するが、いずれも取り難い。これは『三水小牘』に依れば、獄中の詩となっており、今、獄中であって李子安に思つた詩と見て置く。その詩には、次のように言う。

羞日遮羅袖 日を羞じて羅袖を遮り

愁春懶起妝 春を愁いて起妝に懶し

易求無價宝 無價の宝を求むるは易きも

難得有心郎 有心の郎を得るは難し

獄中に在りながらも、春の季節の遣る瀬なさを「愁」い、なお、「有心の郎³⁰⁾」、情愛ある男

性の得難さを歎く魚玄機、そこには、道教の悟りの境地を垣根見ながらも、恋愛感情の迷妄の世界に呪縛され散っていった閨秀詩人魚玄機の実像が映し出されているのである。

結 語

飲氷食藥志無功 氷を飲み藥を食うも志功なし

晋水壺関在夢中 晋水壺関 夢中に在り

《情書もて李子安に寄す》

山路欹斜石磴危 山路 欹斜 石磴危し

不愁行苦苦相思 行くことの苦しきを愁えず相思に苦しむ

《春情 子安に寄す》

魚玄機はかくも直截に情炎の燃え上がりを歌い、恋愛感情による呪縛の苦悩を言葉に連ねる詩人であった。

小論は、この魚玄機の実像を把握するのに、まず、鷗外の同名の小説が、宗教上の関点より見るならば、『寒山拾得』とは相違して、悟りの世界を描くのではなくて、もっぱら、魚玄機の迷妄の世界を描いている事を指摘し、続いて、魚玄機の伝記の史料としては、『太平広記』所引の唐の皇甫枚の『三水小牘』に依るべき事、そして、その中で、魚玄機に対して発せられている「鍊師 三清長生の道を求めんと欲するも、未だ解珮薦枕の歡びを忘るる能わず」との批評が、道教的な悟りの境地を求めながらも、男女の愛の歡びを遂には忘却し得なかったこの女流詩人の心の葛藤を良く表現していると考え、更には、「相思」「多情」「含情」など、情念より発する辞句を多用する魚玄機は、また、何よりも「愁」の詩人としてその名が記憶されるべき事を論じた。魚玄機の編年的な把握は他日を期して、一まず、攷筆する。

《注 釈》

《注 釈》

- 1) 『魚玄機』と『寒山拾得』とを比較対照して論じる研究は、従来、余り多くないようである。
- 2) 以下の『魚玄機』『寒山拾得』『寒山拾得縁起』の引用は岩波文庫本に依った。
- 3) 長谷川泉『森鷗外論考』参照。
- 4) 田口正直「鷗外小論——『寒山拾得』を中心として」(『論究日本文学』) 昭 29. 11
- 5) 斎藤茂吉、岩波文庫版『魚玄機』の解説参照。
- 6) 三島由紀夫「鷗外の短篇小説」(『文芸』森鷗外読本)
- 7) 斎藤茂吉『鷗外の歴史小説』(『文学』昭 11. 6)
- 8) 斎藤茂吉『鷗外の歴史小説』
- 9) 「歴史其儘と歴史離れ」は、筑摩版『森鷗外全集』に依った。猶、岩波版全集も参照した。
- 10) 菊池寛「鷗外氏の歴史小説」(『新小説』増刊・文豪鷗外森林太郎、大 11. 8)
- 11) 『石川淳全集』第九卷
- 12) 斎藤茂吉『鷗外の歴史小説』

- 13) 服部之総「歴史文学あれこれ」(『明治維新史』所収)
- 14) 桑原武夫「歴史と文学」(『朝日新聞』昭17.6.21-25)
- 15) 拙稿「道教と隋唐の歴史社会」(『道教研究のすすめ』所収) 参照。
- 16) 括弧内の日本語は筆者。
- 17) 西村富美子「唐代女流詩人論一魚玄機」(『四天王寺女子大学紀要』第6号) 参照。
- 18) 奥野信太郎「鷗外における中国文学の位置」(『群像』昭23.7)
- 19) 葉德輝の観古堂彙刻書所収の『唐女郎魚玄機詩』に載せる考証を参照されたい。
- 20) 『太平広記』所収の緑翹の条のアルファベットの大文字の部分と、『統談助』所引のアルファベットの小文字の部分が対応する。[例 (A) ↔ (a)]
- 21) 西村氏前掲論文参照。
- 22) 皇甫枚と『三水小牘』については稿を改めて論じる予定である。
- 23) 阮元『學經室外集』参照。
- 24) この場合の「禅心」は、仏教用語と言うよりは、それを撰取した道教用語と解するのが妥当であろう。
- 25) 那珂秀穂『支那歴朝閨秀詩鈔』参照。
- 26) 松浦友久氏は、「詩語としての“怨”と“恨”——閨怨詩を中心に」(『中国文学研究』第3期)の中で、「恨」を情況が不可変的・固定的な場合に使用されるものとしている。
- 27) 言うまでもなく、西晋の潘岳に始まった「悼亡詩」は、中国文学の中で一つのジャンルめいたものを形成しているときえ言える。
- 28) 辛島驍氏の「魚玄機・薛涛」(『漢詩大系』所収)は、通常的一般向けの翻訳書と相違して、極めて高度なもので、その魚玄機についての解説も、その編年による解の解釈も、現段階での魚玄機研究の白眉といって良いものであるが、何故か、余り実証のない「李子安」=「李億」をとって居られるのは遺憾である。
また、辛島氏は、『三水小牘』の紀年についても疑念を抱いて置られるが、温璋の事はともかくも、魚玄機の死については『三水小牘』の紀年を採用してもよいのではなかろうか。
- 29) 温庭筠の文字については、村上哲見「温飛卿の文学」(『中国文学報』第5冊) 参照。
- 30) 「有心郎」は『統談助』所引の『三水小牘』では「有情郎」に作る。今は、『太平広記』所引の『三水小牘』に従う。